

綴葉

てい
よう

'26 10

No. 451

あなたが創る生協の書評誌



話題の本棚

重永瞬著『新しい日本地理 地図・統計・移動から読み解く』

清水侑季著『教養としてのカレー』

特集／京大作家インタビュー（第六弾：畠山丑雄）

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館2階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/



univ. 京大生協
CO-OP

綴葉編集委員会

あたりまえの「地方」を問い直す

新しい日本地理

地図・統計・移動から

読み解く

重永瞬著

講談社現代新書



日本——私たちがいま暮らしているこの国には、自分一人では認識しきれないほどに異なる土地が散らばり、人々が生きている。学校では、47都道府県が書かれた地図を見て、一つ一つの県の名を覚え、産業、名産品を学び、国の輪郭を認識する。テレビのニュースでは、日本各地で起きたことを見聞きする。ぼくたちは教科書やメディアで得た知識をつなぎ合わせ、日本という島国の像を組み立てて、自分がいま生きているこの世界を理解してきた。

本書『新しい日本地理』は、当たり前前のこととして受け入れてきた、日本についての知識を揺さぶってくる。なかでも本書が中心に扱うのは「地方」という区分——日本を北海道、東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州といった地域的なまとまりでもって認識する見方だ。著者が「地方ブロック」と呼ぶこの区分けは、政治・経済・文化のあらゆる分野に浸透している。しかし、あたりまえのように受け入れている「日本の都道府県が地域ごとにまとまっている」という認識は、実態を見とすぐに揺らいでくる。

そもそも、このような地方ブロックが成立したのは明治時代であり、それ以前の主要な地域区分は「五畿七道」だった。京の都を取り囲む「畿内」と、東海道や山陽道、東山道や北陸道といった道に

沿う地域が一つのまとまりになっていた。現在の「地方ブロック」は、戦後における国土の開発計画の中で用いられていく。つまりこの「地方ブロック」概念は、「トップダウンの行政にとっては効率がよく合理的」なものにすぎないのである。

本書は、地方に対する異なる見方をいくつも提示する。たとえば北海道から山陰にいたるまでの日本海側は豪雪地帯という共通項を持つ。かつてこの地域は北前船の交易によって栄え、雪に閉ざされた冬は織物や漆器といった地場産業を生み出した。しかし明治中期以降、関東や近畿といった「太平洋ベルト」で工業化が進展し鉄道網が整備されると、日本海側からは人口が流出し、経済的・社会的な後退から「裏日本」と呼ばれるようになっていった。

「新しい地域区分を考えることは、はるか遠方のどこか、そしてそこに住む誰かに対して想いを寄せることでもある」。本書が強調するのは、地域的な特徴は気候や土壌といった環境によって規定されるのではなく、歴史のなかで形づくられてきたものだ、という見方だ。「裏日本」の経済的衰退も、豪雪という気候条件のみを要因とみなしてしまえば、経済格差を仕方ないものにしてしまう考えにつながる。こうしたイメージを打破し、多層的な要因に目を向けることは、人口減少や経済格差といった現代的な問題に取り組むためにも必要な姿勢だ。私たちは常に断片的な知識を結びつけ、他所の幻想を作り出してしまつ。そうした幻想に囚われず地域の実態を理解する糸口を、本書は与えてくれる。

(たいやき)

(二一六頁 税込一五四〇円 6月刊)

カレーヲタクの頭の中を覗く本

教養としてのカレー

清水侑季著
集英社ノンフィクション



「カレー」という料理。多くの人は、ニンジンやジャガイモ、玉ねぎや肉などを入れた鍋に、固形のルーあるいはカレー粉を入れて煮込む、日本の家庭料理を思い浮かべるだろう。しかし、「カレー」という料理には多くの定義が存在しており、大きく分けると狭義のカレー（日本のカレーライスをはじめとした、カレーと名のついている料理）と広義のカレー（スパイスやハーブから香りを抽出した、炭水化物と一緒に食べるおかずであり、汁気の有無は問わない。そして、「炭水化物と一体化した状態で仕上げられるスパイス料理」も含まれる）が存在している。本書では、この広義のカレーを採用し、「カレー」の多重性、そしてその言葉に包摂される複雑な背景や歴史、人々の認識がそのまま描かれている。（正直、マーボトウモロコシも、「カレー」的な料理、あるいは広義の「カレー」ということができるというのは衝撃的であった）。

「曖昧でありつつ日常に入り込んでいくのに世界を組み替えるポテンシャルをもった……便利な言葉で、それだけで確かに何かが伝わらしてしまう」ことを問題視している著者は、全編を通じてこの部分を意識しているように感じる。そして、カレーの元となるインド

の食べ物が多くが個別の名前を持ち、カレーとは呼ばれていないことや、カレーの語源として考えられる南アジア諸語の単語などを挙げながら、「インドの食べ物に対して西洋人が押し付けた……植民地主義的文脈を持つ」言葉であることも説明している。一方で、これらの食事を広義の意味で「カレー」と呼ぶ意味もあるという。

他にも、どのように「カレー」が西洋料理に取り入れられたのか、食のタフが多いいインド（ヒンドゥーの多くは牛肉を食べず、ムスリムは豚肉を口にしない）、そしてジャイナ教徒は厳格なベジタリアン、など）において、どのような食文化が発展しているのか、古代インド料理やアーユルヴェーダとカレーとの関係とはいかなるものなのか、多くの知識が詰め込まれている。中でも、著者が経験したおいしいカレーづくりのコツなどは、著者の感想も相まって非常にユニークな分析がされている。

本書は、評者の後輩の著書である。実際に本人を知っているからこそ、彼が「カレーヲタク」であると明言できるし、隙あらば（何なら隙がないときでも）カレーを煮込んでいる。翌日に学術発表を控えているようにも、飲み会に誘われていようとも、「カレーを煮込むので」と言って、自転車にまたがり颯爽と帰宅する。もちろん、彼のカレーへの情熱はそれだけ大きいものであり、そんなに情熱を注ぐ理由も十四節の「めんどくさい男はなぜスパイスカレーを作り続けるのか」に記載してある。現在南アジアに住んで、彼がスパイスカレーを作る理由とはおおよそ異なる理由で毎日「カレー」を作っているからこそ、新しい視座を知ることができた。（フランチ）

（二五六頁 税込一八七〇円 6月刊）

〈特集〉京大作家インタビュー



今年もこの季節がやって来ました！ 京大作家インタビュー第六弾です！

今回は 2025 年に『叫び』で芥川賞を受賞された畠山丑雄さんにお話を伺いました。畠山さんは京大文学部在学中に『地の底の記憶』（2015）でデビューされ、『改元』（2024）、そして『叫び』を発表されています。畠山さんの作品はどれも歴史や物語との関わりがモチーフとして表れています。こうしたアイデアがどこから生まれるのか、どのような姿勢で作品を執筆されているのか。さらに小説を書くことの基礎となる「読むこと」との関連も踏まえ、インタビューを行いました。

——まず、大学で専攻した分野、小説を書き始めて作家になった経緯を教えてください。

大学では文学部に入っていて、三回生で専攻が分かれる時にアメリカ文学を選びました。せっかく文学部に入ったということでも色々読み出した時に、同時に書かないと読むことも分らないなという思いがあったので小説を書き始めました。五回生の時に文藝賞を取ってデビューして、小説家になったっていう感じです。

——書かないと読めないから、実際に自分で書き始めたというのがすごいですね。

僕はずっとサッカーをやっていたんで、やらないと分からないっていう考え方があって。サッカーの監督とか戦術家とかってみんなプレイヤーなんですよ。で、小説もそういう面があるんじゃないかなと。そんなに具体的に考えたわけではないですけど、サッカーのノリのままで、書くこと読むをセットにした方がいいかなあくらいの気持ちで始めました。

もともとは文化人類学をやっていたんですけど。僕は漫画読んだり映画見たりしかしてなかったんで、浪人した時にこのまま文学部に行ったらいじめられるんじゃないか？ と思って、結構本好きだった親に何を読んだらいいか聞いたんですよ。そしたら渡してくれたのがレヴィ・ストロースの『悲しき熱帯』と

エリック・ホフファアの『エリック・ホフファア自伝…構想された真実』とヴァン・デル・ポストの『影の獄にて』っていう小説で。これとレヴィ・ストロースが人類学っぽい方向に寄ったのもあって、文化人類学やりたいなあと思って大学に入ったんですよ。それから、文学部は人類学担当じゃないってわかって、文学研究の方へ。でも京大の文学研究って実証的っていうか、いちいち文献チェックしたりとかで、今はその価値をわかっているつもりですけど、こんなやってやれへんと思ってる。それやったら自分で書こう、書かへんとわかれへんしな、みたいな気持ちで書き始めたという感じですね。

——初めての小説はどんな内容でしたか？

初めて小説を書いて、すぐ完成できなかったんですよ。それでも二回生の冬ぐらいに完成したのかな。それは思いきり『影の獄にて』の影響を受けて。第二次大戦中に、南洋の方にいた日本軍の話を書きましたね。それをすばるに出したら三次まで残って、この調子で行けるなと思って、順に出すようになりました。

——あまりご専攻のアメリカ文学の影響を受けているように見えませんね。

そんな気がしますね。僕もむしろラテンアメリカの方がはまって。今でも読むのはメル

ウィル、ポー、ホーソーン、トウエイン、オコナー、ナボコフ、ヘンリー・ジェイムズぐらいかなって感じです。

指導教員が若島先生やっただけで、アップダイクとかニコルソン・ベイカーとかチーヴァーとか、洒落たシティ小説みたいなものも読んだんですけど、そんなに好きじゃないなあと。それでアンダーソンとか、フォークナー、オコナーの南部方面に行っただけで、時間が経ってみるとフォークナーとかってやっぱりナボコフが批判するのかわかるというか、ちょっと適当な部分があるなって。だから今でも参考にしてるのは、カーヴァーやヘミングウェイの切り詰めた文章とか、ナボコフの描写とかの技術的な面ですね。

『歴史と土地が交錯するフィクション』

—— 畠山さんの作品は、郷土史が強いテーマとして通底していますね。舞台設定に関するこだわりなどありましたら教えてください。

妻と炭木に引っ越してきた時に、その郷土史があまり知られていなくて、最新作の『叫び』は、それを使いたいなと考えたんです。

まず前提として僕が考えてるのは、小説の中でいかに動きを出すかっていうことです。でも、歴史の葉脈ってかなり細かく張り巡らされてるんで、ちょっと人を動かすだけでも、

歴史上の実際の出来事とか、実際の固有名詞を持った時とか場所にすぐぶつかるんですよ。

ね。ぶつからんために、あるいはぶつかったとしても説得力を失わへんために、そのぶつかったところをうまく描く。ここまですフィクション、ここまでがリアル、みたいなことが見えちゃうと読む気失せちゃうんで。そこを均しつ、かつその現実の出来事を小説の中にも取り込んでいって——僕は現実の「形を受け取る」という言い方をしますが、その境目で得たエネルギーを作品の中で波及させるみたいなやり方をしています。

すると、どうしても土地の歴史が大事になってくる。土地の話がおもしろいってのもあるんですが、大前提としては、実際に人を動かしていくなかで、SFでも、寓話でも、区切られた箱の中でもなく、もっと自由に人を動かしたいと思うから、歴史とかにぶつかりやすいって感じですね。だからその土地の歴史について考える必要が出てくる。

—— 畠山さんの作品では、実際の土地を舞台にしたものと、フィクションな土地を舞台にしたものがあります。両者はご自身のなかでどう使い分けているのでしょうか。



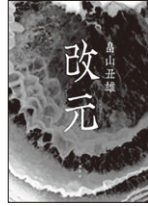
『地の底の記憶』や『死者たち』は、年代記のような、かなり長い時間幅で書いているじゃないですか。細かいところは要所要所で入っていくけども、基本的に誰がどうしたこうした、というかたちで。かなり引きのカメラで、全体の大きな流れに飲みこまれていく様を書きたかったんです。そうなるって歴史の面を書いただけで精一杯なんですよね。土地との接触面みたいなことをやると百年単位で書くのは難しくなるんですよ。『地の底の記憶』には電波塔が出てくるのですが、たとえば炭木のよう現実の土地を設定してしまうと、百メートルの電波塔なんてないじゃないですか。あったらみんな絶対知ってるはずなので、もう嘘やんそれってなるんですよ。小説内のアーカイブと読者のアーカイブに齟齬が起きるんです。だから百メートルの電波塔を出そうとした時点で、具体的な土地って出せなくなるんです。あるいは大きめの事件、精神病棟を作るとかもそうですね。

年代記的な語りの中やと、戦争とかに絡んだような大きな事件、ボンボン起こせるじゃないですか。ただ、実際の土地を設定すると大きな事件を起こそうとしても、いや、そんななかったよって話になってしまって、初歩のところで踏み絵に嘘を受け入れてもらわないと読んでもらえないということが

起る。だから長い時間の中で大きな事件を起こすんやったら、実際の土地の設定は難しいんです。

——「改元」「叫び」はなんじょう。

「改元」とか『叫び』は舞台を現代にしようと思ってたんです。現代の一回目の事件、つ



まり、クライマックスが起きて、なんかやばい事が起きたってところでバツンと切れる話ですよ。そうすると二回目の事件なんで、僕的には許せるんですよ。事件化されるのはそれが終わった後じゃないですか。『叫び』とかもああいう事件があって、それが事件化される前で終わってるんでフィクションの強度落ちないと思って。必ずしも小説と現実が一致する必要はないんですけれども。都合のいい恣意性や手つきが最後の方で見えたら、もう許しちゃおうってなるんですが、それが早めに見えるのと読む気失せちゃうんで。

——現在と歴史性が交錯する空間として坑道というモチーフが使われています。層の中に埋もれた時間という主題、関心はどのようにして生まれたのでしょうか。

もともと旅行とか、郷土史とかも好きだったんですけれど。小説を書いてるうちに「土

地の歴史に」ぶつかることが多くて、リアルな世界を舞台にすると、こんなに早くぶつかるんやっていうのが、書き始めの頃に驚いたことでした。その処理の過程で、「現実の形を受け取る」というか、その影響が入って来て、僕の書くこととしていたことが変容していくみたいな作用がすごく面白かった。

ただ、完全に現代を舞台にすると、過去の話を入れるのってすごく難しいんです。現代文学って、過去の虐殺や負の歴史を扱おうとしたものが多いじゃないですか。でも、現代の人が過去の虐殺とかに触れるってすごく難しい。我々はインテリだから、過去の歴史に対して向き合わなあかんという規範意識を普通は持ってますよね。でも、小説自体はそういう規範意識を要求できないので、読み手が「その昔の話、何が関係あんの?」みたいなになってしまふ。それを小説の側で「いやそれを関係づけられないのはお前の規範意識が足りないからや」って言ってもあんまり意味なくて。「うん、それはなんか関係あるなあ」っていう風に読者に思わせなあかんのですけど、それがすごく難しいんですよ。困らなあかんよ、反省しなあかんよと言われるけど、やっぱり現実的には、マジョリティって普段生きて昔の虐殺で困ることがないから。だから、規範意識として読者に関係づけを委託

するんやなくて、あくまで小説内でどうにかして関係づけないといけない。そこに大きな工夫がいるわけで、どうしようかなっていうのも考えてます。たとえば、歴史と自分の現在を取り違えるとか。それって要は頭おかしいわけですけど、頭おかしくならへんと過去の事が今の人間に痛みを持って迫るということでは起きないので。その状態までどうやって持っていくかがすごく大事だと思ってます。

坑道とかもその中で必要になってくるんですよ。過去と繋がるには、頭おかしくなってる、現在と過去を取り違えてしまふか、超現実的なことが起きるか。そこで坑道みたいな空間が出てくるのかなと。そのなかで、ばっとなんてでもないことが起こることによって初めて、負の歴史とか何であれ、普通に考えたら全然我が身に関係ないものが関係あるものとして迫ってくる。今を生きているはずのお前にも血が流れる。そんな瞬間が、そういう手続きを踏んだらあり得ると思うんです。

《小説を書くこと、読むこと》

——先ほどのお話に戻る形になりますが、実際に小説を書かれるようになって小説の読み方が変わることはありましたか?

小説を受け入れるか、受け入れないかがより大事になったかな。読む時に作品世界への

信頼度が下がってセロになったら本を開けてしまふ。そこに鋭敏になった気がしますね。研究の方に進んでしまふと、とりあえず読まなアカンし、それがすごく弱くなってしまふと思うんですよ。たとえば村上春樹の『ねじまき鳥クロニクル』は評価が分かれるんですよ。僕もそうやけど小説家って苦手な人多くて。後で面白くなるんですけど冒頭が認められへんというか。小説って画と違って一望できるわけやなくて、基本的に右から左に読んでいくしかないでしょう。右から左への移行が受け入れられなかったら後で一望した際の画がどんなによくてもだめなんで、そこが読んで何かを述べようと思っている人とは違いますね。

——確かに文学研究では素直ではない読み方をする場合も多いですね。

フィクションですからね、別に本当は中の人間がどうなったっていいじゃないですか。でもその状態のまま読んでいっても面白くないわけ。フィクションの世界のことが自分にとっても重要になってくるから読む。僕はよく「取り違え」って言うんですけど、フィクションの世界の大事さが、いつの間にかこっちにくる、みたいな。別に原理原則じゃないでどこかでその瞬間が来てしまふ、そこを見るようになったかなって思いますね。

——『叫び』の主人公も自分と過去の人物を

「取り違え」てしまいますね。

フィクションってどうでもいいんです。でも読んでるうちに頭おかしくなると、そうじゃなくなるっていうのが普通の読書。それをどうやって起こしていくかみたいなことに心を砕くし、読んでる時も、ちゃんと没入できるかな？ っていうのが一番気になりますね。その上で初めて細部の読み方がある。逆転が起きなくなると、変な話、より直感的になった気がしますね。美味しいか美味しくないかわたっている時に、レシピのことを考えない、みたいな感じです。

——小説を執筆する方は技巧の方に目が行くのかなと思ったのですが、逆なんですね。

美味しかったら技巧についても考えようと思うけど、美味しくないご飯のレシピ考えてもじゃあない。新しい工夫があるとか、今までにない調理法を使ってるとか、でもまずいじゃんこれ、みたいな(笑)。読書がレシピの楽しみというか、精神的な楽しみになっちゃうんで。そうではなくて、おもしろいかおもしろくないかって味わってから入った後で技巧を考える感じですね。

《京大生へのメッセージ》

——それでは最後に、京大生の皆さんに向けてお勧めしたい本があればお願いします。

月並みですけど学生は時間あるんで、時間かかる読書をした方がいいかなと思いますね。ベタやけど『失われた時を求めて』とか『ドン・キホーテ』とか読んでよかったなと思いますね。日本やったら『源氏物語』とか『細雪』とか『豊饒の海』とか、あんなを読むといいと思いますね。学生の頃って人生経験も少ないし、変なことしてるとせつかく時間があって勉強できるって強みも失われてしまふと思うんで、あんな細かいこと考えず、長い名作を読むといいと思いますね。

——自分も『失われた時を求めて』を積読しているの、読みたいと思います(笑)。

あれは退屈な部分も多いんで、千ページくらい要らないんじゃないかみたいな。本当に目の運動だと思って読んだらいいと思うんですよ。それでも体には入ってくるんで。

——頑張ってください！最後に、京大の皆さんに向けてメッセージをお願いします。

京大に入った一番のメリットって勉強する環境が整ってることやと思うんで、地味で辛い基礎的な勉強を頑張ってください。文系やったら古典読むとか語学頑張るとか。それをやり続けることで自由になれたり、なれなかったりするんで。そういうしんどいことも楽しんでほしいなって思いますね。

(波見戸・猫足・荒砥)

新刊コーナー

台湾夜市大全

三文字昌也著
産業編集センター

台湾、都市を生きる人間の熱気（熱鬧）は路地に宿っている。夕刻、騒めきを頼りに角を曲がると、路上にひしめく露店群――

夜市が現れる。本書は、長らく台湾の夜市を都市計画学の観点から研究してきた著者が、夜市をあらゆる面から解剖する「大全」だ。

屋台に挟まれた通路を通りぬけると、立ち込める熱気と混ざり合う匂い、きらびやかな看板に掻き立てられる。夜市にみられるグルメや商売を網羅する1章は、まさに夜市を歩いているかのような構成だ。葱油餅や蚵仔煎といった定番的小吃に食欲をそえられるのももちろん、ピンボールや酒瓶釣りといったゲームについての記述には著者の情熱がこもっている。夜市にあるものを並べてみることで、日本の縁日とは異なり、台湾の夜市がいかに日常生活に溶け込んでいるかがよく分かる。続く章では、夜市の立地の特徴や夜市の形

成史、夜市を可能にする制度やインフラ、そしてなにより日々夜市に働く人びとの実態を取り上げる。夜市は、日本統治時代、露店を管理しようとした日本の都市計画と露天商の間のせめぎ合いの中で形成されていった。そして現代にいたるまで、夜市は社会や都市空間の変化に合わせてその姿を変容させてきた。夜市の歴史は、管理や排除に抗い、ときには折り合いをつけながら、皆が自由によりよく公共空間を活用しようとしてきた歴史だ。読んでいるうちに、気づいたら私は台北行の航空券を取っていた。

（二四頁 税込三二〇円 6月刊）

（たいやき）

接続された脳とヘーゲル

シンギュラリティにおける主体性の行方

スラヴォイ・ジジェク著

池松辰男ほか訳 誠信書房



アンナ・コンンパーという文学者が二年前に『Immediacy』（直接性／即時性）という評論を出したが、欧米の批評界において「直接性」は現代を読み解く二つのキーワードとなっているように思える。であればジジェクは、本質的に時代遅れの哲学者だと言

えよう。というのも、ヘーゲルやラカンに影響を受けた彼の思想は、徹頭徹尾「間接性」に貫かれたものだからだ。

さて、本書のタイトルである「接続された脳」とは、心のプロセスがデジタル・マシンに接続された状態を指す。マシンが脳に外挿されるこの技術によって、考えたことを現実ひき起こせるだけでなく、自分の思考と他者の思考を直接的に共有できるようになる。これまで発話や文字、電話、ネットなどの媒介を挟んでなされたやりとりは一気に短絡し、他人の脳との直接的な意思疎通が成立する。その結果、それは一層高速かつ正確なものとなるだろう。実際に、イーロン・マスクが出資するアメリカのニューラルリンク社では、これを可能とする技術の開発が進められている。

それに対してジジェクは、コミュニケーションが迂回させられ、制限され、延期される、そうした事態そのものもたらず豊かさを対置する。人間の経験は、自他の亀裂をその本質的な契機としており、言葉や媒介による間接性なくしては存立しえないのである。

主体を閉じた直接性から引き離すヘーゲルの思想は、現代でも輝きを失わない。ジジェクは言う、二二世紀はヘーゲルの時代となるだろう。

（花瓶）

（二二八頁 税込三五二〇円 6月刊）

「物語消費論」集成

1989-2021

大塚英志著

ZEN 大学出版会

二〇〇一年に刊行

された東浩紀の『動物化するポストモダン』は今なお読まれ

続けている。しかし一九八九年に発表された

大塚英志の「物語消費論」はどうか。『動ポ

モ』は「物語消費論」がなければ書かれなかつた——つまり東は大塚のこの本を（重要な

参照軸かつ）批判対象として取り上げたわけ

だが、こちらは『動ポモ』に比べればあまり

読まれてこなかったのではないか。

けれどもこの状況は本書の刊行を通じて変

わるかもしれない。「物語消費論」は消費社

会論として世に出たのち、大塚自身の手によ

って、広告論、メディアミックス論、プロパ

ガンダ論、労働論等々としていくつものヴァ

リアントが生み出されていったのだが、それ

らを一冊に「集成」したのが本書である。

大塚が「物語消費」という現象を説明する

うえで持ち出すのは昔懐かしいビックリマン

チョコ。周知の通り（？）このチョコにはシ

ールが付いており、当時の子どもたちはシ



ル集めに夢中になった。それゆえビックリマンチョコは「チョコ」として価値を持っていたわけではない。価値を持っていたのは「シール」なのだ——となれば話は単純なのだが、議論はそれで終わらない。シールの裏面には短い神話的な物語が書かれていて……。

大塚が最終的に描き出すのは創作者と消費者のあいだに（物語を紡ぎ出す）「創作する消費者」が現われる事態である。『動ポモ』だけじゃなくてこちらもね。

(四二〇頁 税込三三〇〇円 6月刊)

(ばや)

きまぐれカプセル

星新一著
新潮文庫

星新一 生誕100年記念作品集
知られざる星新一
星新一の傑作選
星新一の傑作選

本書は星新一の生

誕一〇〇年を記念し

て、新たに発見され

た複数の未収録エッ

セイと三編のショートショートを収録してい

る。星は千編を超える作品を発表しているが、

更に未収録のものが発見されたのだ。その中

で「聖地」だけは未発表であり執筆年不明の

下書き原稿として紹介される。この作品は星の処女作と同時期頃に執筆されたとき、今回は特にこれを取り上げることになろう。

全太陽系が人類の支配下に入った世界、暇を持て余した子供と老人は今や陳腐なものとなった「ジン・マシン」で遊ぶことになる。

電気エネルギーによって思念したものを具現化できる装置。子供が装置で模型を作り終えた後、老人もその機械に思念を飛ばし、莫大な電力と引き換えに人形を作り出す。しかしそれは本来なら作り得ない生命。老人は神だと言う。結局人形は没収され山上の頑丈な建物に入れられた。時の経過とともに老人も死に、その神もいつの間にかいなくなり、人々はかつてそこに神がいたと囁き、やがて神などいなくなったと囁く——。

星の初期作品によく現れていたSF色が見られるに加え、物語終盤には時が経つにつれて、祀られた神が風化し人々が徐々に神に対して懐疑的になっていく様子が端的に淡々と語られる。即ち物語が伝承によって民話化していく様を描いているのだ。民話という特徴は星の晩年作品に強く現れる作品傾向であるが、それが初期の未発表原稿に現れていることは大変興味深い。この作品は既に最終到達点の片鱗を見出せる一作と言える。（時間）

(三〇四頁 税込六九三円 9月刊)

多類婚姻譚

風良ゆう著

講談社



「あきらめなさい。

罪はいつか償わなき

やいけないんだか

ら」／「ほくがいつ

どんな罪を犯したって?」／「個人じゃなく、あなたたちより上の世代の男が犯した罪」／「なんで上の世代の罪をぼくたち世代がかぶらなきゃいけないんだ」／「そういう理不尽もひっくるめて、今は歴史の帳尻合わせ中ってこと」

『流浪の月』『汝、星のごとく』で二度の本屋大賞を受賞した風良ゆうは、一貫して愛する人とともに生きることの難しさに光を当ててきた。そして五つの短編が織りなす本作の主題は、結婚をめぐる息苦しさだ。例えば中年レズビアンカップルの行き場のなさ。田舎から上京し上昇婚に執着する女性の悲哀。

なかでも印象に残ったのは、冒頭で引用した『Position Talk』。男性が女性を抑圧してきたことに自覚的な主人公・律は、入籍間近のパートナーとリベラルな関係を築こうとする。出産によるキャリアの中断、家事育児の分担

……だが愛し合うはずの二人の目線はどこまでもすれ違う。属性が帯びる加害性と個々人の自由を前に、他者とともに生きることが可能なのか。この時代の息苦しさを描き出す本作は、きわめて現代的な小説だ——その解が見出されていないという意味においても。

この社会は私たちが持て余すほどに多様で、それぞれの正しさと苦しさはすれ違う。足元に転がる誰かの生きづらさを拾い集めても、自分の歩くべき道は見つからない。私たちにとって結婚とはもはや、肥大化した自由と理想を積みすぎた方舟なのか。 (浅煎り)

(三二〇頁 税込二〇九〇円 5月刊)

キャッシュとディッシュ

岡崎祥久著

フィルムアート社



俺はもうすぐ五十歳です。貯金はまだなくて、時給一〇〇〇円で週に五日、ち

いさな製麺工場で働いています。『キャッシュとディッシュ』の語り手はぼそぼそと語り始めます。弟がやってきます。叔父さんが失踪してしばらく経ったので、死に扱いになっ

たそうです。部屋には何ものこっていないなくて、白い皿が一枚転がっているだけだったそうです。ところがどうでしょう。その皿から水をかけたものは、翌朝なんとそれを買った代金に戻っているのです！ ながいあいだ俺にまわりついていた生活感がフツとやわらいでくれて、「ああ！ これでもう、だいじょうぶだ！」とおもえて、よく晴れたあかるい窓の外をみながら俺はしみじみしたきもちになりました。(…）もつこのまま日ざしに托けてしまってもいいとさえおもいました。

これでどんどんお金に戻していくことにします——必然的に訪れる結末までは、ということですが。叔父さんはなぜいなくなってしまうのだとおもいますか？ 最後まで読み終わったなら、あなたにはもう一度「ああ！ これでもう、だいじょうぶだ！」に戻ってきてもええかな、と思います。お金から、つまり生活から、ふっと解放された瞬間に訪れるのがなぜ、「このままもう日ざしに托けてしまってもいい」という自己消滅の自己許可なのでしょう？ 生きることの労苦から解放されることが、生きること自体の停止へとつながってしまうこの感じを、そのときにはきっとあなたにもわかってもらえるのではないかと、とおもっていますが。(コーク)

(二二六頁 税込二二〇〇円 6月刊)

ブルックリン

コルム・トビン著

榎木伸明訳

白水ブックス

アイルランドの田舎町で暮らす娘アイリッシュは、故郷を離れてニューヨーク



のブルックリンで働き始める。やがて一人で生計を立てられるようになり、移民の若者に恋をする。しかし、一度帰郷してみると意外な出会いがあり、恋人が待つアメリカに戻ることが億劫になる。今後彼女は、アイルランドとアメリカ、どちらで生きていくのか。

こう書くことありふれた話に見えるかもしれないが、本書の魅力は話の筋にあるのではない。それは、二つの土地の複雑な人間関係のなかで彼女が人との距離を慎重に測っていく、会話の描写にある。たとえばブルックリンでは、職を転換してくれた神父、職場の上司、下宿の大家、同じ下宿に暮らす女性たち。彼らは期待に込めるべき相手であり、助けを求める相手であり、しかし全てを打ち明けることができないほど信頼できるわけではない相手でもある……。その微妙な駆け引きが、一つ一つの会話に緊張感を与えている。

また、異国での彼女の成長を支える、故郷で共に暮らしていた母や姉との関係にも注目したい。人間関係に戸惑ったとき、彼女は母や姉が人に接するときの毅然とした口調を真似することで、相手の思惑に惑わされず、自分の気持ちに正直にあろうとする。しかし異国で自立するほど、母や姉と三人で過ごした日々と故郷は遠ざかる。だからこそ、二つの土地をめぐる選択は、故郷で育った自分と異国で作った自分の両者を抱えながらの葛藤となり、ありふれているように見える物語を切実なものにしているのだ。(波見戸)

(二五四頁 税込二五三〇円 5月刊)

反ミーム部門は存在しない

q n t m 著

鳴庭真人訳

ハヤカワ文庫



「反ミーム」は自身に関する情報を秘匿し、関わった者の情報を喰らう。反ミーム部門は、異常存在(アンノウン)たちのうち「反ミーム」的性質を持つものを専門に扱う「機関」の二部門である。

本書はウェブサイト「SCP財団」の記事

を元に執筆された。このサイトは「異常存在を確保、収容、保護する団体(SCP財団)の報告書」という体の創作である。出版にあたっては著作権上の問題でいくつかの用語の書き換えが行われている。例えば、このSCP財団は本書で言うところの「機関」にあたる。SCP財団の記事を元にしているとはいえ、予備知識が必要というわけではなく、本書自体が元サイトの面白さを抽出したものとなっている。興味を持たれた読者は、ぜひ元ネタの方も読んで頂きたい。

我々の生活を脅かす異常存在と、それに対峙する組織。物語の道具立てとしては王道だが、「機関」の反ミーム部門が対峙するのは人間の認識を、理解を阻む存在である。そこにいるはずなのに、認識することができない。それに関する記録を抹消し、我々の記憶を改竄する。認識した者に物理的な損傷を与える。そんな相手と、どのように戦えばよいのか? そもそも、「戦う」ことなどできるのか?

反ミームのアンノウンたちは、その実態を捉えることが非常に困難である。存在したものを存在しなかったことにする。記憶が、記録が、加速度的に失われていく。そして

が、され、とき——もはや『反ミーム部門は存在しない』。(荒砥)

(四〇〇頁 税込一七六〇円 7月刊)

一粒の麦

グギ・ワ・ジョンゴ著

粟飯原文子訳

光文社古典新訳文庫



ケニアは一九六三年、約七〇年に及んだ英国の支配から独立を果たした。独立。

それは希望に満ちた始まりであり、植民地の記憶を生々しく湛えた瞬間でもあった。本作は六七七年、独立からわずか四年後という熱狂の渦中に発表された、ケニアの大家作家グギ・ワ・ジョンゴの代表作である。

独立前のケニアでは現地人による武装蜂起が展開されていた。マウマウと呼ばれるこの闘争は、ケニア独立史の輝かしい一ページとなったが、英国の弾圧によって二万人以上の死者を出す凄惨なものでもあった。本作が描くのはマウマウの巨視的な歴史ではない。それに身を投じ（させられ）た人々が闘争をどう捉えたのかという微視的な歴史である。

作品全体を貫くのは、ある種の黙示録的な世界観である。随所で引用される聖書の言葉と、解放運動の指導者キヒカの言葉——真の犠牲が必要なんだ……ケニア解放の十字架を背負う者がケニア人にとって真のキリストなん

だ。宣教師がその手に携えていた書物は闘争の言語へと転用される。一方、キヒカの出身村の人々は否応なしに闘争へと巻き込まれていく——なぜキヒカは闘争や問題に巻き込まうとするんだ？ ぼくがやりはじめたわけでもないのに。そしてある日、キヒカは告発されて英国行政に処刑される。キヒカの首には賞金がかかっている。裏切り者は、一体？

六〇年代のアフリカ文学者の多くは、独立国家の顕揚と文学的表現の狭間で動揺していた。本作やアチエ『崩れゆく絆』を読めば、その困難と苦闘がよくわかるはずだ。（倉井）

（五二八頁 税込一八七〇円 8月刊）

世界が生まれた朝に

エマニユエル・ドンガラ著

高野秀行訳

中公文庫



「この一冊の本にアフリカの全てが叩き込まれている」と

訳者・高野秀行が表現する本書。コンゴ人である主人公・ンガ

ガの一生を通じて、伝統社会での生活や宗主国による支配、そして独立と近代化という歴史的な流れを大局観でみる。

ンガの人生は、主体的に体験できるものではない。主人公の経験や感情は、多くの日本人にとっては想像することすら困難なものだ。例えば冒頭。母親が畑で孤独にンガを産み落とす描写から始まるが、その存在が人間であるかどうかを疑われ、どのように彼を人間であることを証明したのか。何度読んでも、なぜ村人たちが人間でないと考えたのか。物語の背景を含めて、著者の含意とその描写を想像することは中々に難しい（訳者あとがきを読むに、この点は評者と訳者・高野氏の意見が相反する部分だ）。

祭司や呪術師、そして賢者としてンガが生涯をかけて追求し、最後に答えを見つけた〈知〉は、現在の近代的な社会では見つけられないものであるように感じる。本書を読んだだけでは、彼の追求した〈知〉を理解することはできない気がする。だが、少なくとも明治維新以降、西洋の影響を受けて近代化が進んだ結果、息苦しい社会になっている日本も他人事として捉えるべきではないだろう。

本書の主題ではないが、各章の冒頭に記載されている詩および古典の節が記載されている。章を通じて展開されていくンガの人生を読み解く上で、これが何を表しているのか想像するのもおもしろい。（フナチ）

（二二八頁 税込一七六〇円 8月刊）

兵庫県知事問題 失敗の本質

小林和樹著 ちくま新書

二〇二四年、選挙のあり方は決定的に変わった。都知事選での石丸旋風、衆院選での国民民主党の躍進、そして失職した知事が再選した兵庫県知事選。いずれもSNS上での情報発信が選挙の行方を大きく左右した。その中でテレビや新聞は、真実を報じていないという批判にさらされた。いらい現在まで、「既存のメディアを信用しない」というのは一般的なりテラシーとなっている。

だが「オールド・メディア」も手をこまねいてばかりいるわけではない。著者は当時、NHKの報道フロアにおり、そこから兵庫県知事問題の一部始終を見ていた。それゆえ本書は、そうしたメディアの自己反省の試みといえる。選挙報道の「量的公平性」、ファクトベースの情報発信——これらは、テレビや新聞が一元的な情報発信の担い手であった時代には信頼に足る原則と見えた。だがソーシャルメディアの発達した現代においては、新たな報道姿勢が求められる。いま一度良識ある報道者とたらんとする彼らを再評価する道があってもよいのではないだろうか。(花瓶)

(二二四頁 税込二〇三円 5月刊)

地域と人口減少の経済学 スマートシュリンクという選択肢

小峰隆夫著 中公新書

過疎を研究する身として、地方の村へ足を運ぶことも多い。人影もない駅前を眺め、地域の未来はどうなるのかと案じずにはいられない。「東京一極集中是正」「人口一億人目標」と言えは聞こえは良いが、これらはいくまで結果として、成し得るもので、スローガンに据えるべきではないと著者は言う。

〈人口減少×地域〉を論じる類書は数多いが、本書の魅力は経済学をベースとした切れ味良い分析だ。印象論や過度な衆観・悲観論を退け、日本の杜撰な地方創生政策の効果が極めて冷静な態度で検証されていく。こうした現状認識から本書が展望するのは「スマート・シュリンク」——賢く縮む未来である。人口が減ってもなお幸福な地域社会を実現するうえで、経済学の知見はいかに実装可能なのか。新書らしく幅広い論点がコンパクトにまとまっており、有益な一冊となっている。

とはいえ、その「縮み方」の具体的なアイデアを深掘りするものも面白そうだ。「関係人口の時代」(田中輝美)なども参考になるだろう。合わせて読んでもらいたい。(浅煎り)

(一九二頁 税込九九〇円 5月刊)

新消費論

消費性愛魔境……誰を誘うる神話の森

林凌著 中公新書フクレ

「新」を謳っているのだから、さてどんなおニューな消費論が展開されるのかと期待していたら——本書の「新」は一味違った。それは「シン」というより「メタ」と言うべきものだった。著者は言う——本書が行なうのは「消費」を用いた様々な語りの観察です。一九八〇年代頃から盛んに語られるようになった消費論、その語りを分析すること、それが「新」の意味するところである。

たとえば「コト消費」「モノ消費からコト消費へ」という合言葉は耳にタコができるほど聞いた気がするが、著者が鋭く抉り出すのは「コト消費」という言葉の無内容さである。この言葉はすでに四〇年以上の歴史を持つが、いまだに最新のトレンドを示す言葉として用いられる。その普遍性はしかし、裏返せばその空疎さを示しているのではないか。著者の主張は少し耳が痛い。「私たちはこの「消費社会」について根底的に考えないために、この言葉を使う傾向があるのではないか」。

コト消費に性的消費に応援消費に、著者は様々に語られるその神話を解体する。(ばや)

(二〇〇頁 税込九九〇円 7月刊)

歩く姿、「雲の上の黒龍」がごとし

血の海と化した現場を見て捜査員たちは真っ青になったが、猫は一匹残らず無事だった。

にゃーと足下にすり寄ってきた猫に、捜査員は思わず微笑んだ。

松田青子著『女が死ぬ』（中公文庫）収録の一作「猫カフェ殺人事件」である。人間が猫に向ける眼差しがよく表れていて、評者お気に入りの一作である。人間がどれだけ切羽詰まった状況であっても、猫は自由だ。現に締め切りが迫る評者のことなど構わず、家の猫（名はひるね）は今の瞬間にだっこしてほしい気がする！と訴えているのだから（多分）。そして人間はいつも、猫に対してはしょうがないなという気持ちになるのだ、思わず微笑みながら。

日本の文献に「描かれてきた猫」を集めた、田中貴子著『猫の古典文学誌』（講談社学術文庫）は、おそらく猫と思われる生き物についての最初の記述を取り上げている。九世紀に書かれた仏教説話集『日本霊異記』には、死後成仏できずに飢えに苦しむ男の話がある。曰く、大蛇となって家に行ったら杖で叩かれ、赤い狗となって再訪したら犬を使って追い払われ、飢えは激しくなった。だが、「狸」となって家に入ると置いてあった食物を飽きるほど食べられた、と。むかしむかしの人間も、猫ならまあしょうがないかと思っただけではなからうか。

本書と共に文献を迎えると、人間と猫の関係性の変化が浮かび上がる。鼠対策として飼われていた猫は、いつしか愛玩動物として手元に置かれるようになる。宇多天皇の日記『寛平御記』からは先帝から譲り受けた黒猫を寵愛する様子が見えてくる。漆黒の毛色を美し

いと褒め称えた彼は、詳細な観察をそこに記した。平安末期には、藤原頼長も日記に猫の思い出を残している。少年時代、飼っていた猫が病気になるたとき、彼は千手観音の像を描いて病気が治るよう、そして十年の寿命を与えるようにと祈った。この時代はあまりに長生きするとねこまた（つまり化け物）になってしまうと思われていたから、「十年の寿命を」というのは、自分の手に負える範囲で目一杯猫を愛する気持ちといえよう。猫は所有物である一方で、「怪異を起こすもの」として畏怖の対象でもあったのだ。

時は流れて現代人とはというと、少々狂氣的かもしれない。冒頭の松田の短編集から「神は馬鹿だ」を引いてみよう。

猫を不死身にしなければ神は馬鹿だ。どう考えても設計ミスだ。

（…）猫は無敵であるべきだった。猫は全面的にすべての厄災から守られているべきだった。猫の毛並みは一生ふわふわであるべきだった。（…）何があるうと、人類が減びようと、地球が爆発しようと、猫だけは不死身であるべきだった。

私たちは猫がねこまたになったっていいと思っている。これは底なしの愛であり、また同時に猫との関係性の変化の表れでもある。私たちはもう猫を恐れてはいないし、現代社会において猫の手を借りることもあまりない。田中も言及するように、文献に残る猫への眼差しは私たちのそれと決して同一ではないのだ。だが音も立てずに歩く猫を「雲の上の黒龍」と例えた宇多天皇とは時を超えて握手できる気がする。猫の誇らしげな様子が目に浮かぶから。（ひるね）

ゾンビ学のすすめ

死から蘇り、歩きまわり、生存者たちに襲い掛かる。そのようなゾンビの姿は、ホラー愛好家だけでなくも一度は見ることがあるだろう。現代のエンタメコンテンツにおける定番の存在といってよい。だが、このような疑問を抱いたことはないだろうか。そもそもいつから「一体何なんだ？」

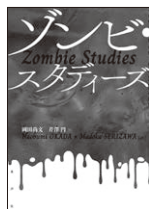


元を辿れば、「ゾンビ」という存在はアフリカおよびカリブ海地域の民間信仰であるヴードゥー教に由来するもので、現地の言葉で「精霊」「亡霊」を意味する。それが二十世紀初頭、ハイチの占領とともに——当然、オリエンタリズム的な眼差しを伴いながら——アメリカに流入した。現地での見聞をスキャンダラスに描いた紀行文

などを通じてハイチの文化が紹介され、それを基に、最初のゾンビ映画である『恐怖城（ホワイ・ゾンビ）』（一九三三）が製作されたのだ。福田安佐子『ゾンビの美学』（人文書院）はそこから百年にわたって展開するゾンビ表象の変遷を丁寧に追った良著だ。福田はまず、ホラー映画におけるゾンビのパラダイムを以下のように区分する。『ホワイ・ゾンビ』に代表される三十年代の「クラシック・ゾンビ」、『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』（一九六八）に端を発する七十年代の「モダンゾンビ」、映画版『バイオハザード』や『28日後…』（二〇〇二）以降の「走るゾンビ」時代である（「いやいや、それ以前にも走るゾンビの例はあっただろう」という突っ込みは野暮というものだ。ゲーム版『バイオ』のクリムゾン・ヘッドや『デモンズ』を射程に含めないからといって、本質的な問題にはなるまい）。そのうえでまず、それぞれの時代を代表

する作品に関して、「クラシック・ゾンビ」を植民地主義やジェンダー的観点から、「モダン・ゾンビ」を現代アメリカの消費社会や「隣人」への恐怖という観点から論じる（やや結論が先走っている感はあるものの）。その継続的な分析は、同時代の社会的諸相がいかにゾンビのイメージに仮託されているのかを暴き出している。そして「走るゾンビ」を論じた最終章は、ポストヒューマニズム的観点からの分析に加え、アガンベンによる「剥き出しの生」の概念を手掛かりにしてゾンビ映画の快楽の本質を探る、興味深いゾンビ論だ。すなわち、ゾンビに対する我々の反応は、社会のなかに包摂されながらも人間としての在り方を喪失した境界的存在に對する、包含的排除という権力の働きにほかならない。

本書は各時代の代表的な作品に対する、ある意味で王道ともいえる論点からの分析を通じてゾンビ映画史を通覧したものだ。そのため、扱う対象や視点の幅に少し物足りなさを感じる者もいるかもしれない。そんな読者は『ゾンビ・スタディーズ』（水声社）を併せて読むとよいだろう。「生ける屍」という伝統に立脚したゾンビ考にはじまり、食人、戦争、アダプテーション、境界性など、複数の著者による多彩なゾンビ論が収録されている。とはいえ作品を見ないでは始まらない。最後に、読者のために主要作品を挙げておこう。まずロメロの『ナイト・オブ』以下『二〇〇オプ・ザ・デッド』系統、フルチ『サン



ゲリア』など三部作、『デモンズ』『パタリアン』『死霊のしたたり』『吸血鬼ボボラ』、『死霊のはらわた』『高慢と偏見とゾ』（猫足）

編集後記

初めまして、波見戸です。6月号から編集委員に加わりました。日本文学が専門です。修士課程を終えたら卒業するつもりなので、(予定が狂わなければ)残り1年半となりますが、よろしくお願いします。

しかし、1年半で何ができるのでしょうか？正直本をよく読んできた方とは言えないので、専門に近い本をきちんと読むこともできなさそうな短さです。でも、研究対象の作家からもちろん影響を受けているけれど、他にも今の私を形成する元になった本があるのです。例えば、6月号で紹介した北村薫さんの著作に『詩歌の待ち伏せ』というエッセイがあります。浪人時代に初めて読んで、大学に入学してからも読み返してきました。最近だと、行司千絵さんの『服のはなし―着たり、縫ったり、考えたり』。元々手芸が好きなのですが、この本を読んでからは、完成品を実際に使い続けるだろうかということを意識しながら新しいものを作るようになりました。こういった、専門とは直接関わらない本にも触れ続け、紹介する1年半にしたいですね。

私が影響を受けた本というのは私の中の文脈があってこそだけど、それも含めて紹介していけたらと思います。改めて、よろしくお願いします。(波見戸)

当てよう！図書カード

今回インタビューした畠山丑雄さんの小説『叫び』は大阪府茨木市が舞台となっています。むかし派遣のバイトで何度か行きましたが、茨木ってどうやっていけばいいんですかね、毎回わからなくなります。さて、茨木市を通らない路線はどれでしょう？

1. 阪急電車
2. 大阪モノレール
3. 京阪電車
4. JR

(花瓶)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から3名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは11月15日です。



《6月号の解答》 6月号の問題の正解は、1. のサルデーニャでした。シチリアに次いでイタリアで二番目に大きな島であり、ノーベル文学賞受賞者のグラツィア・デレッタや思想家アントニオ・グラムシが生まれた土地でもあります。図書カードの当選者は、ボカディージョさん、図書館キャムパーさん、ぴっぴきさん、美馬駿さん、たくあんさんの5名です。当選おめでとうございます。(荒砥)

読者がらひつじ

○18禁。攻めた企画ナイスです。

(理学研究科・えび天天)

— ありがとうございます！ なかなか『綴葉』では扱われてこなかった、扱いづらいテーマだったと思うのですが、特集を担当した三人がかなり面白い書評を書いてくれました。巻頭言も怪しげでいいですね。

○6月からWeb読書マラソンを始めました。よろしく願っています。

(農学研究科・図書館キャムパー)

— 大学生協が行なっている、在学中に本を百冊読もうという企画ですね！ (すみません、知らなかったので調べました) 畠山さんもおっしゃっていたように、大学時代は本をたくさん読むチャンスでもあります。読者の皆さんも是非！

○いつも楽しみにしています。京都は暑すぎますね。

(医・いぐりこー)

— ありがとうございます！ 本日に暑いですね！ お盆は群馬北部にある実家に帰省していたのですが、暑いとはいえ何とか人が生きることを許される暑さだったような気がします。これを読者の皆さんが手に取られる頃には夏も終わっているでしょうか。(荒砥)